



之書函書卷之第拾目録

- 一 加列村老云仰む事
- 二 利光云山内保の事
- 三 幸ら大坂陳起の事
- 四 む仰下出の事
- 五 法華寺の焼事
- 六 信達合戦の事
- 七 古田藏部事
- 八 長書和英方同候の事

加金府四丁木三番

三傳





伊豫を移すは六日少くは三日に全陳を  
事思く四序止の如く思ふ上を人全陳の上教に  
致すは四田を一日に思ふに其の如くは  
之師洗ふるに如く思ふに其の如くは  
多く病人を思ふに其の如く思ふに其の如くは  
四道に敵軍を思ふに其の如く思ふに其の如くは  
夫也と云ふに其の如く思ふに其の如くは  
りて四道に此月十八日四所(山見)に其の如く思ふに其の如くは  
致し十九日大坂の程に其の如く思ふに其の如くは  
月廿日梅津の如く思ふに其の如く思ふに其の如くは  
小瀬を思ふに其の如く思ふに其の如く思ふに其の如くは  
の如く思ふに其の如く思ふに其の如く思ふに其の如くは  
福崎の如く思ふに其の如く思ふに其の如く思ふに其の如くは  
おぼく思ふに其の如く思ふに其の如く思ふに其の如くは  
あれを思ふに其の如く思ふに其の如く思ふに其の如くは  
公を思ふに其の如く思ふに其の如く思ふに其の如くは  
丹後を思ふに其の如く思ふに其の如く思ふに其の如くは  
海を思ふに其の如く思ふに其の如く思ふに其の如くは

進と大坂の江中多下野と如敷集人正安多常刀下作  
けり致又九の儀野但るを性次其阿保ちち氏志存  
加敷肥後と松平宮内少将け人との野田福修情芳り  
園をとの長をそく悉く改修し首を之致すと平子主膳  
首と松平宮内少将同横川浪を又討れ御感状下さる  
情芳の園とらるゝ由公叙年のたのり安宮持はぬ能は  
田舟人など大ねと是大岡のたのるよとれよ立向しと  
廣言の者ししり前集町(出狂女と名盛し群外で  
彼のめくを知ると然正之敬記出入人も儀を記せ  
是面白かきと福修と云ふ事と傳りり由多し大  
坂もと小倉他は其に大野修理の勢と下保(五)と  
北九りに在りし殿九名と向井の監提の境が押寄  
生挿之人首七つ無私好多しある大野及大坂は此  
向目と云ふく城迹の要害も焼取の城中と云ふ事  
く同月廿七の城の東水は太和川流まが橋を渡ると  
を京橋と云い川よりと福と云ふと下り川の南と野  
野と云廣地之城の東成福修と云城原より大寺  
ほりはくけりとの事よと福芳八坂行修屋と福修の



也了後家又兼八坂尾の味を立退轉野（白）兼獲つ辰よ  
板京を既とく七旬よ棄つと武者を子やうよあましく公元  
多や子先よをんく城方の者よ白ひ田造ら古為川白  
おん為每人と周谷をよあまを地を存せある度よ又  
人たよ鉄炮よあり漸よ引退く板京も少く鉄炮よ  
退く後中内務女とをきく民勇自傷ましく御傷杯も  
随分いふまゝにわぬ板京れけよの大おれ、城の  
外者（ま）よ合戦左方の者よやん退きと物事よ轉野  
合戦公元わく早の上はとく川は毒よ矢代を毒まて  
兼獲り白ひ上言れ由中内と兼勝座机よ板京を指す  
く四指しとけ進てと為し海し及道の作しとよあら  
中つて兼家原公守らるれ世うすわとろ轉地乃人將  
あれと師と（お）し（お）花とれ本机より（お）と（お）海富とつと（お）  
北と流石（お）通信う法と結者物とと信とつとれハ人、心  
子如丹七り四半時（依竹城尾上板を置く御次ゆく合戦  
の四得定をぬく）と依竹城乃山岡守甚者依竹守と  
あましくとと吃る瀨尾山城と御軍法を破り板京成  
ほしく原竹先よと板京小討候し味方もたたく討死い



きし一依行をよと失ひし中下うりしは依行もを  
かひきと傳より入るる便と傳りてはよと傳りたるは  
ぬれ家やたぬるといふに御軍法と方と中下うりし  
と云はれしんトさういふに方と云はれしは是れ  
ゆゑをみおれしる白のまに仲先をさうし一依行の  
うしはとさうし公をさうしと款を打てし味方と和を  
いふとさうしをみしにさうし依行人おぬりしは上は  
ましと眼あはえさうし家法九とゆふとさうし  
しとさうしゆめはさうし依行のまに味方と仲先を  
下さうし一横合をさうし依行人おとゆふとさうし  
しとさうしと依行のまに味方と依行のまに味方と  
四月分をさうし批判の上をさうし是れよなる切後  
さうし長をさうしと依行のまに味方と依行のまに  
武者のまに味方と依行のまに味方と依行のまに  
各をさうしと文下は依行のまに味方と依行のまに  
とさうしと依行のまに味方と依行のまに味方と  
信がこれ別と依行のまに味方と依行のまに味方と  
原の依行のまに味方と依行のまに味方と依行のまに

中下うりし

先相公御目見いさし一命とけなすことしとく東軍の陣  
少よかむと軍地極正成り兵法の術をその公城と極を柵を振  
運成事刃銃炮を校間一つよむヶ元仕しけ加賀越前北越前  
陣よ白をすり十二月四日朝音ぬく西の色も入るさ家以  
海常よりと云はれよ加賀越前あまの人の故をよれ佛の御  
城を極と城下(す)とて真田川沿甲下番よ銃炮を以て  
よき武者よりと祈いしよとらる加賀のえよ小幡因女  
同也つらよと勵え是夜大將大向京他古馬番の傍すよ  
柵を破る越前と二つよまて只中と打あれをちより運運ま  
に流るせられはる氣が服よもあつり又討進りちや  
あつち死骸の中へあはれ大考あつり大向京他古馬せられ  
思ふ事とら有る我と且けん者りもあつて首とれ  
呼もよも真田在馬是をす親子武者とみはれ  
勇士やちと討りて登あし打ぬくもく大馬  
をあつりしりくちちちあつあつ人銃炮とくちちち  
すあし又よ一に槍よ依よち銃炮大將古田也馬  
又格外記も入るよと勵え討死を越前の軍兵を何處よ  
痛く勵まげよと松平忠房も七年十の軍程と皮のぬ







うら花をせむん女をさうあさ考外行、行し之を九戲ま  
けを運成用とさしけと又考松云乃る子母と云く字  
年一有と云く詮は行 おおゆーいささ心さあされ  
これと云卒をいさゆとしけ一はよ死とて宛わさ  
山毎表天をうわ下<sup>つ</sup>せあひ竹殿より合流と稱家表  
左史まうめんを城申一申入運竹殿に善地動さこれと多  
くの女中是をす地入斗よんくよく、**刀軍**家より徳軍  
皆城申よるくい辺に遊致作せさう下と宛をせ給ふ  
此中大神所上さうとらやとよけ城幸命よ力政り  
あつ城の根と先心門に徳籠城の母信長と年政多し  
前とせとて信よ太田徳築<sup>いづ</sup>せ給ふし中く一旦  
責給、枝よ信せしるさや上さ有之只打止るいと違  
給ふ御示さ中少信後とてさう計しと上さ有之  
女母さあ、京極有枝さし中と京極八織田有采  
内書し進と城申しに事り我方し和隆よもあは  
と給ふ人とも有るさ考松云の御母表乃る妹り  
常高院英織田有樂又野修院信長在之命かと和隆  
せしめ危南和隆れな給ふ下とて常高院と信長在

帝と御所へ幸上紅く由らむとけある所は御所宮有  
て上さしは秀頼母を沈人よ後さる又も血証を埋平均  
よなりとる毎煩の内河進ととも因由よたわくハ和徳と  
し御下さるるまゝ一秀頼と御母表へ上されし  
河進の由もつけよし（注） 頼と城外よ脚せんよとてハ能  
はたの限に此後存非ハ立懐多されされの成一と  
ハるまの義もハくも子業公共頼もあつてハ其  
上個右右乃内よを因由存恩の老ん多くとわもたさ  
城一人も入老行一守る城中ハは敵（内通の老有  
之也）の世もハ其ハ前も類をハ一且御母君の心た  
わ士平はたあよハ和徳多これ因由ハ由延む物多  
なるハ義進と上れハ是能多くいふ知もし御とれ  
ゆり也ハ一御子もあつ上すハ其もハ平一と  
極と埋しとハ二十ニリ廿一りハ和徳の交潤、廿二のハ  
平多員徳も同其後も勝川もあつ松平下総ち依久  
召何内もハ代宮内ハ御如御集人正人ハハまひりて  
よ分ハくことありし御進御所二條ハ入御もこれ廿五  
日に織田有宗大北修庵く礼よハ其後ハ女ハ茶磨





是とあるれ山海記に京中を申と始く山振也十四日  
軍より山役者よりて經御ねん十の京に於て後作  
兼中膳とす十の辰の刻地震歟 廿日在京中  
陸女乃不没街とあり十の午と約之水山折檻十八日  
より伏見一乃軍邊御より自ら見ると十の酉前田七高  
高文子在京中御所を侍るより京小幡文四より  
石の山御所へ廿四日申付るに本陣より京に御女  
四高内より京へ八日猪下一入付るれ少を法京御振也  
此御所より京へ經道成寺至京に御所  
山は如海の如く先云御所より京へ御所也又古田  
御所乃せられ茶の湯を御所より二月朔京御所  
月和余よ山御所二日とはは之日足田河今庄所より  
御所より京へ御振也六日金伏より御所へ入  
百十のりより金伏より下振也八日林了家より御所へ  
山は如く御所より京へ御所也

之 京中大改陳記

山は如く御所より京へ御所也  
元和二年 西 辰より申す 秀頼公の御母君と將軍

秀忠公乃許登所とも仰見すれは中略を秀忠公の以能  
君と秀忠公の以能登所と仰見すれは中略を秀忠公の以能  
大内も能れよ思召す中略を宣知すしと云々は法信人  
と云々も能れよ思召す中略を宣知すしと云々は法信人  
許信りんまの祿の落勤も迫出れまを中略を宣知すし  
押す中略を宣知す中略を宣知すしと云々は法信人  
通れよ思召す中略を宣知すしと云々は法信人  
信り何れも能れよ思召す中略を宣知すしと云々は法信人  
士農工商と云々も能れよ思召す中略を宣知すしと云々は法信人  
民部を能れよ思召す中略を宣知すしと云々は法信人  
これと云々も能れよ思召す中略を宣知すしと云々は法信人  
和隆と云々も能れよ思召す中略を宣知すしと云々は法信人  
等しと云々も能れよ思召す中略を宣知すしと云々は法信人  
情を能れよ思召す中略を宣知すしと云々は法信人  
乃と云々も能れよ思召す中略を宣知すしと云々は法信人  
と云々も能れよ思召す中略を宣知すしと云々は法信人  
中略を能れよ思召す中略を宣知すしと云々は法信人  
斗略に能れよ思召す中略を宣知すしと云々は法信人









て紀州へと首をたれ 長部大守の念れを梳抄物とて言ふ  
芝振り初と歎所より佳絶とて新其とて言ふより新其紀州  
言ふは人の大攻勢ハ叶とて行れ紀州方へ首好山百  
索討れとて申し甲申十二とて大攻勢の所軍に任たれ  
坂道のきよとて言ふ一歩の遠也但るもとて振動固決言す  
為女每人とて言ふはきよとて言ふは歌とて言ふは瑞とて言ふは  
の外固進とて言ふはとて言ふは但るもとて言ふは果つとて言ふは  
あれて権村肯推ちとて言ふはとて言ふは是紀州行れとて言ふ  
故陣正友紀州の侍無に無庫をけめとて言ふは某一紀州  
御控よとて言ふは作すとて言ふはとて言ふは物事とて言ふは先子後野在  
門是紀州とて言ふはとて言ふは物事とて言ふはとて言ふは先子  
あつとて言ふは無庫とて言ふははけとて言ふはとて言ふは度とて言ふは  
紀州有田日高とて言ふは部の盛織め味吉冠とて言ふはとて言ふは  
の小川とて言ふは一撥を起し無は是とて言ふは計徳とて言ふは  
捕りし可し右を揚とて言ふは権村肯推ちとて言ふは先子  
侍とて言ふは内権村とて言ふはとて言ふはとて言ふは某田  
お田又た是利とて言ふはとて言ふは何とて言ふは  
云とて言ふはとて言ふはに 麓地抄家とて言ふはとて言ふは





れ者もく石捕拷問よりんをいけ大井れちぬる古田  
織戸並申宗元乃々ともそく前出の居る味多き  
織戸父子六人仰成ぬ大井十人獄門よりそく古田を  
の目利と違ひ足す事とに愆るあ是も表松の  
仰運の弱さよりそく

ハ 表松と泉との縁起勸業

城中は常高屋敷より此の地へはくむは  
作すあはれと大井とをえりもるる事作すとい  
一も表松と一白井のりぬれとも連なりぬれせん  
まくはるしと辛とを信するあはれに井の先は伊勢  
無印表松れあち松平下総ち中多員徳と之方軍備門  
卒しと岡と奉りけりもる大及勢本村せりしに  
了増田右馬同兵共是は中田隼人也多我知八侍并掃部  
先のしや白のり徳炮の音と也も多く斗りて表松  
ちは八尾の境を白しれ泉先の縁起勸業敵と近分衣  
表と初んともれ泉吉を降し七人所隔しと牛隊あり  
ちとと鷹ら攻めしと一も表松とよや中表と知の勸業  
集る唯のしと合戦しる事は何れもあはれ縁起あり



入江公ゆのこの武者家一しこり強集一之百金  
一知あれも後進傳くまうまふ一鉄炮打合を  
知あき方ありハ尾のきよ火とけり川九をさ  
中尋れを敵とけり毎く是とけり長くまうま下地  
已如し一法法まふく打破る海とふく中を  
いし五巻あり危角まふり集り勢六七騎あり後進  
芒と振まうま九のまふりはんく攻めりまうま我軍  
是らまうま武者と敵とまうまおしりまうま鉄ひあけり日  
まうま乃ん昔り入處と云まうままうま中河の品進けり  
首之百四十本行れ勝國あけり後進ハ公代り行りまうま  
或人のまうまけり海後進助兼とまうま一と敵場とまうま  
危くまうま打極めりハ知あき後法せと様とまうままうま  
是より行死せまうまの公代り見進此れりまうまおしり  
まうままうま一引まうま軍人まうままうま二万とまうま  
抱一度よのらみれ知あき多まうまれりハ知あき様ひま  
まうま作事まうままうま軍人まうままうままうま  
まうま法社まうま推唐まうままうま

九 本村長もまうま行死入事

同日伊予掃部と飯森海兵衛江村を白旗に降参り  
大坂より本村長もこの口を閉ざりて因縁新十郎從右衛門兵衛  
兵衛之次郎子守等もこの口を閉ざりて死す此れを  
僅甲統緒と號めく先を叩く大坂のふゆを掃部と  
伊予兵衛子守等もこの口を閉ざりて死す此れを  
必本村長もこの口を閉ざりて死す此れを  
伊予内代本村長もこの口を閉ざりて死す此れを  
此の方本村長もこの口を閉ざりて死す此れを  
を延く一これこそ本村長もこの口を閉ざりて死す  
この口を閉ざりて死す此れを  
言を延く一これこそ本村長もこの口を閉ざりて死す  
人のまゝ様多の城もこの口を閉ざりて死す此れを  
を延く一これこそ本村長もこの口を閉ざりて死す  
も多く願をわくはれよ此れを延く一これこそ本村長も  
田村八郎早人の首をせよ此れを延く一これこそ本村長も  
長道よりこの口を閉ざりて死す此れを延く一これこそ  
也とされし又此れもこの口を閉ざりて死す此れを





子一帯をみ毛折をよし後合大正と教一山雲を信  
濃を帯刀も折免一兵部取進とを自々引込く美田  
美と所所のゆは海一水をさるるを在る是田流あち細  
川砂巾を以あよましくも後せしむ毛利をあちち中多小並  
原を多折れきゆいよく美田と一ゆり多いく教一地煙  
ましく突く一ゆりはゆり之者くくれく前よまあ  
て以下知るるれけは如賀部あち公の太侍折了跡とて  
横倉よ折るるを了美田毛利の捨るを跡よゆり有せ敵  
と味予し入札とせ受くも中夫よゆりゆり何貴ゆりゆり  
所の御達決心の一く美田れく運の未く美田無き物  
達と妻の跡よ美田勢も應進てとくくくく物達と折  
下よ大の流路のうされよ子折門太刀も弱中果は折る  
もくもこれゆりまゆ折ぬゆりくくくくは換炮にく美  
田とるるゆり折るるを應あちゆりゆり為危に在るゆり折る  
美田の首をとれよあち大池とるるハ是山は如賀れ先ゆり  
梅くゆり折るる如賀分五るゆりゆり事なれは折るるを  
折る入札と折るゆりゆり折高るゆり折免魂煙くゆり  
太刀の光る夫呼の夢ゆりゆりゆり折言大也ゆりゆり改めく





の名をたゞし。沙り多き以年之

南 秀頼公の御方を返す。

六一八の秀頼公の御方を待り隠居御方ありしに  
之申よ大世経理を何そとて秀頼公の御方を  
ありて是終つ流刑智つれを被下一所よ以え達と見  
布下しつて公をあられ新く秀頼公を被下  
則しつて御方ありしに隠居しつて秀頼公の御方を  
之免しつて古事ありしに公をあられ御方ありしに  
之免しつて二條の御方ありしに公をあられ御方ありしに  
一帯も御方ありしに御方ありしに御方ありしに  
此を其人の御方ありしに御方ありしに御方ありしに  
富田御方ありしに御方ありしに御方ありしに御方ありしに  
濱入御方ありしに御方ありしに御方ありしに御方ありしに  
あん流下しつて御方ありしに御方ありしに御方ありしに  
御方ありしに御方ありしに御方ありしに御方ありしに  
下し御方ありしに御方ありしに御方ありしに御方ありしに  
と云ふ加御方ありしに御方ありしに御方ありしに御方ありしに  
を是止しつて御方ありしに御方ありしに御方ありしに御方ありしに





大國の光の爲に秀頼公を以て御有る由に奉流せし

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

懐痛を以て迷ひ甲斐守を以てせむる事一に於ては

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

事一に於ては、秀頼公の御有る由に奉流せし

甲のついでに、多具を<sup>入</sup>し、髪は<sup>他</sup>に<sup>と</sup>ら<sup>ず</sup>の  
と<sup>ひ</sup>ひ<sup>か</sup>き<sup>し</sup>、<sup>し</sup>ら<sup>し</sup>の<sup>た</sup>お<sup>も</sup>ち<sup>に</sup>、<sup>か</sup>き<sup>し</sup>る<sup>こ</sup>と<sup>を</sup>  
今<sup>も</sup>感<sup>候</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ず、<sup>そ</sup>れ<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ず、<sup>し</sup>ら<sup>し</sup>の<sup>た</sup>お<sup>も</sup>ち<sup>に</sup>  
既<sup>に</sup>少<sup>く</sup>な<sup>り</sup>、<sup>と</sup>し<sup>ら</sup>し<sup>の</sup>た<sup>お</sup>も<sup>ち</sup>に<sup>も</sup>  
進<sup>ん</sup>だ<sup>ら</sup>し<sup>の</sup>、<sup>し</sup>ら<sup>し</sup>の<sup>た</sup>お<sup>も</sup>ち<sup>に</sup>  
は<sup>な</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>し</sup>ら<sup>し</sup>の<sup>た</sup>お<sup>も</sup>ち<sup>に</sup>  
い<sup>は</sup>れ<sup>ば</sup>、<sup>し</sup>ら<sup>し</sup>の<sup>た</sup>お<sup>も</sup>ち<sup>に</sup>  
あ<sup>ら</sup>ず、<sup>し</sup>ら<sup>し</sup>の<sup>た</sup>お<sup>も</sup>ち<sup>に</sup>  
あ<sup>ら</sup>ず、<sup>し</sup>ら<sup>し</sup>の<sup>た</sup>お<sup>も</sup>ち<sup>に</sup>

之臺閣書卷十拾一終

卷

